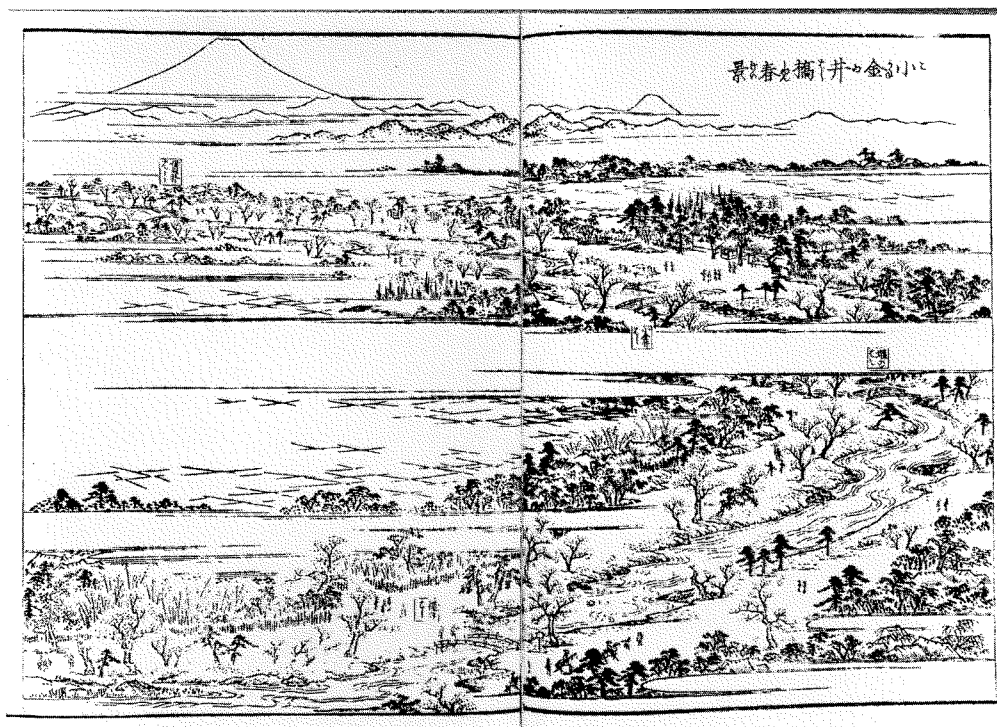


あるむせお

府中市郷土の森だより

No. 19

al museo



武蔵野の風景 4 『江戸名所図会』より 小金井橋春景

国分寺段丘崖の上、つまり府中から見れば北側にあたるところに、広大な武蔵野の台地が広がります。武蔵野は、果てしなくススキが茂り、はるかに富士を眺める風景として、文学や美術のなかでイメージされてきました。

その武蔵野の荒地も、江戸時代に、多くの困難をともなつた玉川上水の完成や、府中押立村出身の代官川崎平右衛門らによる新田開発などを契機に、様相を大きく変えていくことになります。上の絵は玉川上水の堤（現小金井市）に続く桜の並木です。この桜も平右衛門が植えた

と伝え、地元の人々の努力で守られてきました。

「爛漫たる盛りには、兩岸の桜、玉川の流れを夾んで一目千里、実に前後尽く際をしらず。ここに遊べば、さながら白雲の中にあるが如く、蓬壺の仙台に至るかとおやしまる」と記されるように、「小金井の桜」は江戸近郊の桜の名所として広く知られてきました。その桜も近代の都市化で衰えていきます。花も人も、時代とともに変わっていくのです。

郷土の森でも、梅の季節を過ぎると、いよいよ本格的な春の到来です。 (〇)

江戸・明治の梅名所案内

—名所記・浮世絵にみる

3月15日(日)～3月29日(日)

府中市の「市の花・梅」にちなみ、郷土の森には梅園が作られ、都内でも有数の梅の名所となっています。今年は暖冬で、梅の開花の時期は例年になく早く、「梅まつり」も早く開催しました。博物館では毎年梅の時期に合わせて、さまざまな角度から梅の文化を紹介する展示会を行ってまいりましたが、5回目の今年は、江戸・明治時代の梅の名所へのご案内します。

幕府が江戸に移り、江戸の町が発展し、人口が増え商業活動も活発になると、庶民の間でも近郊地の花見や社寺参詣に出かけることが普及し



ました。はじめのうち口コミで広がっていった名所旧跡も、寛文2（1662）年、浅井了意が著した『江戸名所記』によりまとめられるに至りました。享保17（1732）年刊行の『江戸砂子』あたりからは内容も詳しくなり、地図や挿絵も豊富に加わりました。天保5（1834）年には、江戸神田の名主を世襲する斎藤長秋ら父子三代の実地調査を踏まえた詳細な記述と、長谷川雪巨の正確な写生による美しい挿絵からなる、7巻20冊の『江戸名所図会』が完成。たいへんな人気を呼びました。同書には梅の名所・名木の地14か所あまりが紹介されています。また、天保7年の『江戸名所花暦』や同9年の『東都歳時記』などのように、「花暦」的な案内書も登場しました。梅がそれらの筆頭を飾る花であることはいうまでもありません。

浮世絵にも梅はしばしば描かれました。歌川広重の晩年の名作「名所江戸百景 亀戸梅屋敷」はゴッホが愛したことでも有名です。この絵柄は、明治以降の二代広重の「東京名所三十六花撰 梅屋敷臥竜梅」に引きつがれました。小林清親や井上安治にも「亀戸梅屋敷」があります。写真の絵は明治36（1903）年に楊斎延一が描いた「亀井戸臥竜梅」です。現在の江東区亀戸3丁目にあたる「梅屋敷」に見事な「臥竜梅」がありました。明治43年の水害で枯れてしまったようです。ただし、延一の絵では右手に亀戸

天満宮が描かれているので、表題と絵柄は一致していません。

広重の作品には蒲田の梅園、杉田の梅林などもあります。ほかに昇斎一景の「小空井（小村井）の梅園」、尾形月耕の「木下川梅園」、芳年の「原村の梅園」などがあります。いずれも明治の中頃まで

庶民の観梅の名所としてよく知られていた場所です。

明治の後半から大正にかけては、交通機関が発達し、行楽地がどんどん郊外に広がっていく反面、消えていった梅の名所もあります。

本展では、こうした江戸近郊の梅の名所を名所記や浮世絵を通じて見ていきたいと思ひます。

(1)

次回予告

写真展

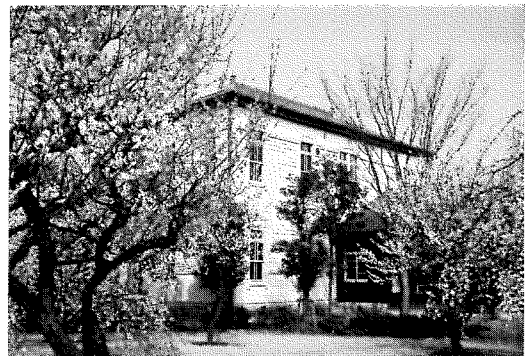
畑 亮夫 郷土の森を撮る

4月26日(日)～5月17日(日)



「郷土の森」は、1987年にできた新しい梅の名所でもあります。梅の種類というのは、紅梅白梅だけではありません。ピンク色はもちろん、紅白の花を一本の枝につけた「思いのまま」、「緑」の梅、一重や八重の花びら、枝垂梅、早咲きと遅咲き、などなど。まさに百花繚乱の梅の博物館となります。

ここに掲げた写真は、写真家畑亮夫氏の作品です。四季折々の郷土の森の姿をとらえた写真展を4月末から予定しています。



きこしめせ 梅か香衛生酒

馬場 治子

市の花、梅にちなんだ郷土の森梅園には今年も満開の花が香っています。当館でお預かりしている宮町・桑田家文書から、約一世紀前、この府中で梅に精魂を傾けて一時期を過ごした人物、桑田佑熙を紹介したいと思います。

桑田家には、昭和58年発行の「府中の老樹・名木-選定と保護-」にも載る、樹齢600年と言われ、「鎌倉代」と名付けられた梅の木があります。これを植えたのが佑熙その人です。

この木が府中に移植された経緯については、猿渡盛厚著「武蔵府中ものがたり」にもあるように、佑熙が明治21（1888）年に町田の嶋崎氏より譲り受けたものです。

当時彼は次々と梅の木を集めていた時期で、「華木買入簿」という帳面には克明に一本一本の記録がつけられています。売り主、買値はもとより、その木の形状、どの木を接いだか等々が図も加えて記されています。なかでも、やはり「鎌倉代」は特別だったらしく、代金もとびきり



の5円なら、その運搬にも慎重を期して手伝いの者達にも酒手をはずみ、木の由来調査もし、植え付けるまでの総経費を24円以上かけています。この買入簿によると明治21～28年にわたって240円弱を投じて買い集めた梅樹は86株、苗木は173株にのぼります。また、他のメモ状の記録で「1町歩 植付420本」として実の成り具合を見込んでいるので、おそらくこの位までは木を増やす心算があったのでしょう。

さてこれらの木を育てるにあたって彼はこれまた、綿密な農事日誌とも言うべき「日本特色

梅樹栽培気節考」をつけています。これには明治21～29年の梅の様子が書かれていますが、天気や気温もよく記されているところから、当時の府中の気象記録としても貴重です。例えば、明治26年の夏は日照りで、雨乞いのために大国魂神社の神輿が渡御になったこと、先の「鎌倉代」が花をつけ始めたのは明治25年であること、24年と30年は梅の成りが凶作で31年は豊作だったことなどがこの文書から窺えます。

豊凶の差はあっても明治25年頃からは実が順調に採れだしたようで、事業化へ向けての実験準備が開始されました。最初は、焼酎と三盆砂糖に漬けるいわゆる梅酒とが、種ぬきの梅実をしその葉に包んで砂糖漬にするとが、アルコール漬した種ぬき梅実をザラメ糖で煮て再び漬けるとが種々やってみたようです。しかし、どうやら27年には梅のアルコール飲料を事業化することに決心がついたらしく、専門家への成分分析依頼などもしています。名付けて「武国府園の梅か香衛生酒」です。

これは梅酒の変形ともいうものらしく、試験品の分析を依頼された大日本製菓や、内務省東京衛生試験所からの回答からみると、色は淡褐色で梅の香がするかなり甘酸っぱいアルコール分に富む飲み物だそうです。また、これを蒸留すると芳香があるので一種のブランデーを製造した方がよいのではないかという助言もありましたが、明治29年10月に東京府知事宛に出された「酒類製造免許申請」にかかわる一連の書類からみると、計画は変更されず混成酒として申告しています。東京税務管理局局長宛の「酒類製造方法申告」に挙げている原料は、梅液、桜液、甘露液、酒精、甘精です。まず4月に桜の花を収穫し乾燥させておき、6月上旬に酒精に漬けた後冷水を混ぜて搾り、その糖にまた冷水を加えて搾り取ると桜液ができます。6月15日頃から7月5日頃には梅の実が成りますから、毎日収穫した新鮮なものの皮をむき、(あるいはその

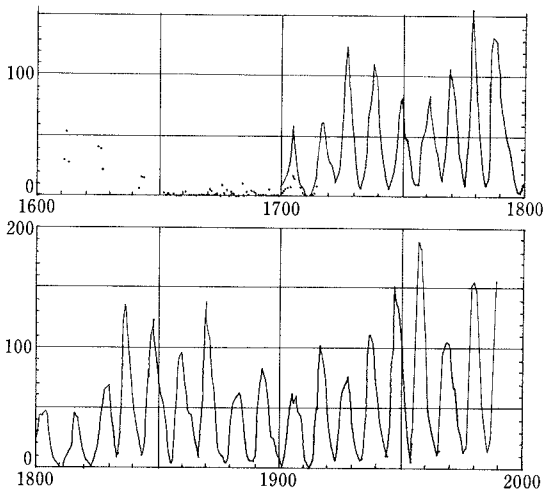
太陽面スケッチ

—まとめ—

前回では、スケッチの結果の整理方法を見ました。今回は、太陽スケッチからどういった事がわかってくるのか、さらには、現在の太陽観測の最先端の話にも触れていきたいと思えます。

=黒点観測からわかること=

前回黒点相対数の話をしましたが、その確定値として、チューリッヒ天文台が全世界の黒点観測結果を集約した、「Zurich黒点相対数確定値(Rz)」を1980年まで、それ以降はベルギー・ブリュッセルの王立ユツクフル天文台が「International黒点相対数確定値(Ri)」を発表しています。これらのデータを理科年表などで調べてみると、黒点数が年々変化していることに気が付きます。1600年からのデータをグラフにすると下図のようになります。



黒点相対数の変化（横軸は西暦）

この図から太陽の黒点が11年という周期で増えたり減ったりしている様子がわかります。これはただ単に黒点が増えたり減ったりするのではなく、太陽の活動状況もそれに呼応しています。太陽を観測していると、減多に見られない

のですが、太陽表面の一部分が突然明るくなる場合があります。この現象は白色光フレアと違って、太陽表面でエネルギーが開放されることによって起こる現象です。特に、太陽の黒点数が多いときに見られる現象です。さらに、太陽表面の影層を観測できる特別なフィルター（H α フィルター）を使うと、フレア（爆発現象）が太陽表面で盛んに起こっていることがわかります。

このように、太陽表面の様子は絶えず変化を続けています。そして、太陽の活動が地球に大きな影響を及ぼしていることも確かです。例えば、大きなフレアの起こった後には地球の南極や北極に近いところでは、きれいなオーロラが見られます。これは、地球を取り巻く電離層にも影響を及ぼし、電波による通信ができなくなるなどの影響をもたらします。また、太陽活動の低下が地球の寒冷化にもつながってきます。

=日本の太陽観測=

現在日本では、国立天文台をはじめいろいろな所で、太陽の観測を行っています。現在注目を浴びているのは、1991年に打ち上げられた太陽観測衛星「陽光」と野辺山宇宙電波観測所に建設が進む電波ヘリオグラフです。「陽光」にはスペクトル観測計、X線望遠鏡などが積まれました。軟X線望遠鏡は、皆既日食でしか普通見られないコロナ、さらに皆既日食でも見ることのできない太陽表面上のコロナも観測できるのです。また、電波ヘリオグラフでは、太陽からの電波をとらえ、瞬時に映像化し刻々と移り変わる太陽表面（影層上部）の様子をわれわれに見せてくれることでしよう。

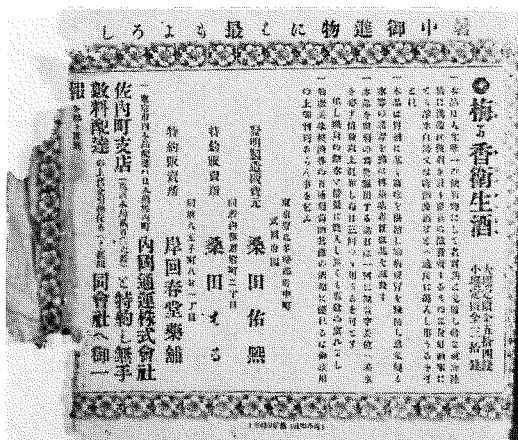
多くの謎が残る太陽。最先端の観測はわれわれではとてもおよびませんが、毎日の太陽表面スケッチの蓄積がこれからの太陽の様子を知る鍵になるので、がんばってスケッチを取り続けたいですね。

(Ho)

まま) 搗いて種を取り、酒槽に入れて梅液を搾り取ります。これにザラメ糖を溶かした甘露液やアルコール等を加えて7月10日頃から末日頃までに混成を終了することになっています。その製造場所は自宅の庭にある17坪の倉庫(2階建土蔵)1棟と1.5坪の掛出し(小屋)部分です。

梅の木を集めだしてから足掛け10年、明治30年の夏から“梅か香衛生酒”が販売開始となりました。初収入は7月10日、10匁代5円10銭と「梅か香衛生酒会計簿」に記帳されています。この帳簿をみると8月21日には大国魂神社で販売開始申告祭をし、末社の酒の神様松尾社にも祭祀しています。そして酒や魚を取揃えて営業開始の祝をしたのは9月1日のことでした。それまでに投入した資金は1500円以上になっています。

当時もやはり物売るには広告です。



“本品は人生唯一の飲料物”と始まる文は多少誇大広告の気味が無い訳ではありませんが、過去10年の経過をみると佑熙の思い入れは伝わってくるようです。効能も“胃弱に基く諸症を根治し肺病感冒を予防し悪気入り水の諸毒を払ひ伝染病原基を滅殺す”とすごいのです。確かに梅の製品ですからそれなりに体に良かったのでしょう。

右の絵は商標の原図として書類綴りに残っていました。大国魂神社の祭神が大国主命と同神だということから図案化されたものらしく、“武国府園”の命名とともに佑熙の府中に対する思いが感じられます。この絵は壘のラベルに

でもついていたのでしょうか。

製品の種類は普通用の大壘、小壘と旅行用と称するおそらく濃縮タイプの物があり、自家で売るほかに内藤新宿と八王子に特約販売店がありました。さらに内国通運株の日本橋佐内町支店との特約契約は、客が手数料無し、代金引換の配達付きで買えるというものでした。このほか31年夏から行商による東京市内の販売も手がけました。これを請負ったのは佑熙の甥の増田盛道です。二人の間の書簡綴りを見ると、この行商もなかなか大変だったようです。盛道からは“購入者ハ皆悪評ヲ下シ……”等と言ってくる始末で、佑熙は“百人百中の事ハ不叶…言に迷ふ事なく……”と強気で返答するものの、秋から冬にかけては物の性質上売り上げは落ちてきます。

明治33年には“梅か香衛生酒”を販売してくれる店もふえたにもかかわらず売れ行き自体はあまり伸びず、「酒類蔵出帳」で見ると新酒を作っているのは32年度までで、後は古酒を出荷しています。33・34年度は酒類製造休業申告を出し、35年12月にはついに“36年度ヨリ酒類製造廃業致”すことを申告し、36年1月に酒精含有飲料製造の免許取消通知を受取っています。しかし内国通運佐内町支店との取引記録も38年まではあり、蔵出帳も41年までは記載されているので、その後も細々ながらも衛生酒の販売は続いていたようです。いずれにしても、当初に投資した資金が回収できた様子はなく、“梅か香衛生酒”は事業として成功したとは言い難いものがあります。

にもかかわらず、佑熙は梅への期待を捨てなかつたようです。36年、37年と今度はジャムの試作に余念がなかつた姿が「梅実調理誌」に窺えます。これが製品化されたかどうか、手元の文書からは定かではありません。でも、一世紀

近い後、府中の花が梅に決まり、この郷土の森で園内産の実から梅ジャムや梅クッキーが作られ、来園者に喜ばれていることを知ったら、彼は大きな声援を送ってくれるのでしょうか。



＝最近の発掘調査から＝

国府が置かれた時代、武蔵国の中心地として府中にはたくさんのもものが集まってきました。その中で、鉄はその実用性や経済性からたいへん重宝され、さまざまなものが作られていました。普通、市内の遺跡の調査からは、たいてい1、2点の鉄製品が出土しますが、これらのほとんどが刀子や鎌などです。

鉄は、土の中にあつては、土に含まれる水分や酸によってどんどん腐食していきます。こうなると錆によって元の形が分からないほどになり、現地での調査中にどんな形のもものが出土したか判断できません。今回紹介する焼印も現地では何であるか分からず、その後の整理・調査によって初めて分かったものです。

さて、この焼印が出土した調査地区は、寿町にある建設用地でした。この調査地区では竪穴住居跡が23軒、掘立柱建物跡が1棟、柵跡が1条、土坑が28基、溝が4条とたくさんの遺構が見つかりました。同時にさまざまな遺物も見つかっています。たくさんの土器に混ざって、緑釉陶器の唾壺、緑釉陶器の破片、灰釉陶器の破片、「京」と墨書された土器、陶硯、瓦、鉄製の鉄・バツクルなど、ほかでは見られないような遺物が多数出土しています。

焼印は、竪穴住居跡から出土しました、この竪穴住居跡は、1辺が約5m、深さ約60cmを計るもので、床面には4本の柱を据えた跡が残

っていました。このほかに、壁にも小さな柱の跡が数本見られます。また、竈が東壁に造られています。かなり南に寄った位置にあります。

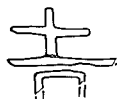
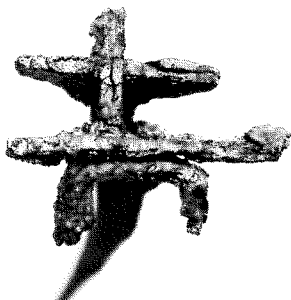
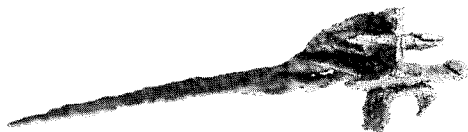
竪穴住居跡の時期については、一緒に出土した土器から10世紀の中頃と考えられます。このころの竪穴住居跡はほとんどが小さく浅いもので、このようなしっかりとした住居の造りはほとんど見られません。

ところで、焼印とはどんなものなのでしょうか？鉄の細い板を曲げたり、切ったりして文字や印部分を造り、そこに細い鉄の棒が柄として付いています。都内では4例ほど見つっていますが、珍しい遺物といってよいでしょう。

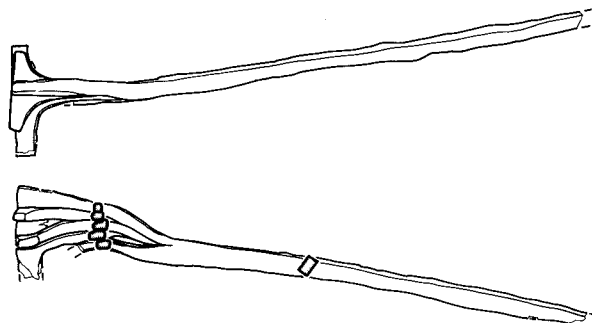
では、どのような時にこの焼印を使っていたのでしょうか。古文書には、「牧」と呼ばれる牧場のようなところで、馬を区別するために焼印で印を付けることが書かれています。また、井戸や、谷から見つかった平安時代の木製の皿には、「全」・「官」といった焼印が押されているものもあります。焼印は大きさから2つに分けられますが、小型のもがおおよそ木製の皿に付けられたもの、大型のものが馬などに付けるためのものと考えられています。今回出土したものは、「吉」と読め、その大きさから木製品に使用されたものと考えられます。

さて、この特殊な住居の中で、珍しい焼印を使って何をしていたのか？この焼印が押されたものが見つかれば分かるのですが、また楽しみが増えました。

(寿町・都堂住宅府中営業所地区の調査から塚原)



縮尺 1/2

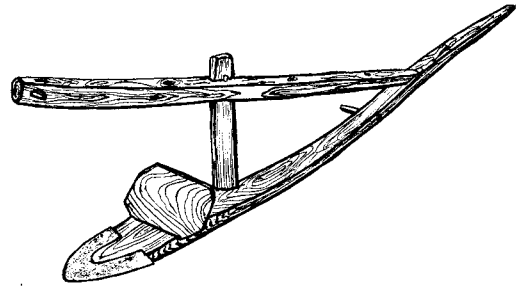


あれこれ

犁 (すき)

皆さんは「鼻どり地蔵」の話をご存じでしょうか。田んぼの代掻きで馬がいうことをきかないで、困り果てていたところを小僧さんがやってきて馬の鼻どりをしてくれたので、あっという間に広い田んぼの代掻きが終わってしまった。実はこの小僧さん、お地蔵さんだったという話です。この「鼻どり地蔵」の伝説は、日本各地で聞かれるものですが、府中でも是政の西蔵院に伝えられています。

さて代掻きや田おこしには、犁や馬鍬という大きな農耕具が使われました。犁にはいろいろな形がありますが、府中で一番古いものはオン



がと呼ばれる犁です。府中で明治の終わり頃使われ始めたこの犁は、うまい人は鼻どりがつかず一人で操るのが普通で、左手でオングの先端(右)を握り、右手で手綱たづなを持って馬を操り右回りに田おこしするものです。

このオングは、全体が2.4メートルほどもある大きなものですが、後年小型化し、また底を安定させるようになります。いずれにせよ馬と人間がうまく気を合わせてやらないとはかどりません。人馬一体とは、まさにこのことをいうのでしょう。犁があれば、そこに馬がいたわけです。(G)

インフォメーション

博物館ならではの講座と体験学習

通年会員の募集をします。

■歴史講座 一史料講読会一

毎月第2・4水曜午後、高校生以上対象。年会費500円。地域の古文書を読みながら近世史を学ぶ会です。3月末日募集締切り。

■こめっこクラブ

5月から翌年3月まで、毎月1・2回の日曜午前、小学4年生～中学生対象。年会費1500円。郷土の森の茅葺農家の前の水田で、昔の農具を使いながら米作りをしています。

ほかに、季節ごとにいろいろなことをしています。年4回発行の「かれんだー」をご覧ください。

美しい星空をお届けします

移動天文観測車ペガサスが出向いて、夜間の星空観測会を開きます。府中市内の子供会やPTA行事などが対象です。事前にご相談ください。ほかに、郷土の森での観測会は月1度行います。

あるむぜお 第19号

al museo イタリア語
“博物館で” “博物館にて” の意
発行日 1992年3月20日
発行 府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921